

北シリアにおけるスンナ派優遇策の開始

——十二世紀前半のハラブ——

谷 口 淳 一

はじめに

十二世紀前半にシリアへ進出したザンギー朝の下で本格的に開始されたマドラサ設立などイスラーム諸学の振興策は、アイユーブ朝やマムルーク朝に引き継がれた。君主をはじめとする支配者層がスーフィーやウラマーを支援した理由は、まずもって彼らの信仰心に求められるであろう。しかしながら、イスラーム国家の支配者としての正統性を獲得するために、宗教指導者や民衆の支持を得ることも、これらの施策の重要な動機であったことが常々指摘されている^①。この時代の趨勢を大局的に見るならば、この見解は、少なくとも真実の一面面を言い当てているだろう。しかしながら、このような見解の多くが、支配者による積極的なイスラーム諸学への支援が当然のこととなったアイユーブ朝やマムルーク朝時代の事例に基づいて提出されていることに注意しなくてはならない。

果たして、支配者によるイスラーム諸学の振興策は、開始当初から被支配者である大多数のムスリムによって支持されたのであろうか。マドラサという新しい制度を導入するに当たって、地域社会では軋轢

が生じなかったのであろうか。このような問題意識を持って考えた場合、北シリアの中心都市ハラブ（アレppo）は、興味深い事例を提供してくれる。この都市は、イスラーム諸学の振興策を熱心に推進したとされるザンギー朝が最初に進出したシリアの主要都市であるとともに、シリアにおける十二イマーム派シーア派^②の一中心でもあったからである。

周知の通り、ザンギー朝にとって護持すべきイスラームとはスンナ派の信仰であり、シーア派とは忌避されるべき異端であった。したがって、十二世紀のハラブにおいては、支配者が進めるイスラーム諸学の振興策とは、スンナ派優遇^③・シーア派抑圧策という性質を強く帯びることになるのである。このような状況では、支配者による宗教政策は、被支配者の反発を招くだけであろう。実際、十二世紀前半のハラブにおいて実施されたマドラサ建設を含むスンナ派優遇策は、ことごとく住民の反抗を招き、混乱を引き起こしたのである。支配者達は、被支配者達の支持を失うような策をなぜ遂行したのであろうか。また一方で、このような策の推進を支持し、支配者に働きかけた人々も存在する。地域社会を混乱に陥れかねない政策の実施を進言した人々の動

窓 機は一体何だったのだろうか。これらの疑問に対して、彼らの信仰の

史 堅さや狂信ぶりだけを理由にあげて事足りれりとするわけにはいかな

い。ここには、イスラーム諸学振興策を遂行した支配者やその支持者の意図を見直すとともに、一連の政策が地域社会にもたらした影響について考える糸口が隠されているからである。

十二世紀以降ハラブの支配者達が実施したスンナ派優遇策に関しては、ソバジェがハラブの通史の中でマドラサなどの建築を中心に言及しているが、あまり詳しいものではない【Sauvaget 1940: 112-114, 123-124】。一方、アザーンの変更に対するシーア派の抵抗と、それに対するザンギー朝の対応については、ハヤトが丁寧に史料を追いかけて考察を加えている【Khayat 1971】。ただし、スンナ派とシーア派の対立を経済問題や社会階層間の争いに結びつけている点は、議論に飛躍が見られ、その見解をそのまま受け入れることはできない。我が国では、梅田がザンギー朝のヌール・アッディーンによるスンナ派優遇策について簡潔に言及しているが、詳細な分析はなされていない【梅田一九七九・七六―七七頁】。また阿久津は、ザンギー朝時代全体を通してマドラサ建設の意図を検討した論考の中で、本稿で扱う一連の出来事にも検討を加えている【阿久津一九九三・三―九頁】。私自身も、ハラブにおけるスンナ派優遇策の意味を考察したことがある【谷口一九九六】。しかし、この論文では、十一世紀から十三世紀にわたる三つのウラマー家系の盛衰の歴史を軸に論を組み立てたこともあって、スンナ派優遇策導入期の問題については、詳細に論じることができなかった。

本稿では、これら先行研究の成果を取り入れながら、スンナ派優遇

策の開始期、具体的には五四三／一四八八年のヌール・アッディーンによるアザーン変更以前に絞って考察を進めることにする。以下、まず第一章で一連の出来事の経緯を順に見ていき、第二章においては、これらの政策の推進を積極的に支持した人々の意図を考察する。さらに第三章では、推進論者と反対派住民の双方から圧力を受けたザンギー朝の二人の君主が採った行動を検討する。そして最後に、スンナ派優遇策が彼らの国家戦略の中で持った意味を考えてみたい。

なお本稿では、当該時期における一連の宗教政策を「スンナ派優遇策」あるいは「シーア派抑圧策」と呼ぶこととするが、そこにはマドラサ建設などスンナ派イスラーム諸学の振興策も含まれることになる。

第一章 スンナ派優遇策の開始

シーア派がハラブの多数派になった経緯については幾つか意見があるが、BT 160 の伝える伝承に基づく次の説が最も信憑性が高いであろう。それによると、三五一／九六九年にビザンツ帝国のニケフォロスIIパオラスがハラブを占領した時に減ってしまった人口を回復するために、ハムダーン朝のサイフ・アッダウラがハッラーンのシーア派住民を移住させ、以後同派がハラブの多数派となった。サイフ・アッダウラがシーア派の住民を選んだのは、彼自身が同派を奉じていたからであった。そしてサイフ・アッダウラの後を継いだ息子サアド・アッダウラ (Sa'd al-Dawla Sarif) の治世 (三五六―三八一／九六七―九九一年) に、シーア派式のアザーンが導入された。具体的には、アザーンに「いざや最良の務めのために来たれ。ムハンマドとア

リーは最も善き人間である」という語句が加えられたという。^⑤

その後、ミルダース朝支配時代末期の四六二／一〇七〇年に、ハラブがセルジューク朝の影響下に入ると、基本的にはアッバース朝とセルジューク朝の支配者の名の下でフトバ（説教）がおこなわれるようになったが〔谷口一九九〇：三一九頁〕、礼拝への呼びかけであるアザーンは、あいかわらずシーア派の流儀でおこなわれていたと考えられる。

第一節 スンナ派優遇策のさがけ

親イスマール派政策を推進したセルジューク家の君主リドワーン (Fahṛ al-Mulk Ridwān) が五〇七年六月／一一一三年十二月に没すると、その息子アルブ・アルスランが若くしてハラブの支配者となった。彼は当初父親の政策を継承したが、住民からの圧力もあって、即位して二ヶ月の後にイスマール派の弾圧に踏み切った。こうして十二イマーム派が再び勢力を回復した。^⑥

しかし、さらにその二ヶ月後の五〇七年十月／一一一四年三月にアルブ・アルスランの後見人としてハラブに到来したトゥグティギン^⑦にとっては、十二イマーム派もイスマール派と同じく嫌悪すべきシーア派であったようだ。彼は「ハラブ人の状態と彼らの礼拝を非難し、王タージュ・アルムルク・アルブ・アルスランを彼らに対してけしかけ攻撃させ、ハラブ人が彼らの宗派 (*maḥab-hum*) を実践していることを非難した」のである。これに対して、ハラブの住民はトゥグティギンの行動を重大視し、いくつか事件が生じた末に、トゥグティギンはディマシク（ダマスカス）へ去ることとなった [TDM 1:72b-73a]。

トゥグティギンは礼拝方法などシーア派の儀礼について非難したようであるが、それ以外に彼がおこなったことについては、残念ながら不明である。いずれにせよ、彼のシーア派弾圧は短期間で挫折した。しかし、支配者によるスンナ派優遇策は断続的に続く。

五〇八／一一一四年にハラブの支配者となったルウルウ^⑧は、五〇九／一一一五・一六年にハラブで最初のハーンカーフ (*ḥanqāh*) すなわちスーフィー達の修道施設を建設した [AH:93]。このハーンカーフは、建設された場所の名をとってハーンカーフ・アルバッラート (*Ḥanqah al-Ballāʾ*) と呼ばれた。その位置はハラブのジャーミイの東側で、今日ではジャーミィ・アスラーン・デデ (*Jamīʾ Aslān Dadah*) がスークの中に埋められるようにして建っている場所に当たる。当時の建物は残っていないようである [Gaube 1984:361, no. 142; Talas 1956:251-253]。

ハーンカーフの建設が始まると、ハラブのシーア派住民 (*jamāʿat al-ḥalabīyīn min al-ṣīʿa*) は反対を唱えた。スーフィー達異邦人主義 (*taʿasīb*) や騒乱を引き起こすというのが彼らの言い分であった。これに対してルウルウが建設を急がせたので、一群のハラブ人達が夜間にハーンカーフを破壊するという妨害活動に出た。そこでルウルウはハラブ人の一団を拘留しようやくハーンカーフを完成させ、そこにユースフ・マルワズィー (*Abū al-Ḥajjāj Yūsuf b. al-Rabīʿ al-Marwazī*) というスーフィーを任じた。彼はハラブに入った最初のスーフィーのシャイフであったとどう [TDM 1:90a-b]。

ハーンカーフ＝アルバッラートの建設から数年後の五一五／一一二

一・二二年頃に、今度はハラブで初めてのマドラサが設立され、建物の建築が始まった^⑧。このマドラサは、建設された街区名に因んでザッジャージーヤ学院(al-Madrasa al-Zajjiyya)と呼ばれることが多い^⑨。建物は現存しないが、その位置は、ジャーミイと市街の南部のキナスリーン門とのほどにあったハーン＝アフマド・パシャ(Han Ahmad Basa)跡に相当すると思われる[Gauhe 1984:82, no. 424]。同学院は、アジャミー家のシャラフ・アッディーン・アブド・アッラフマーン^⑩が、当時の支配者バドル・アッダウラ・スライマーンに働きかけて創設させたものである。

ザッジャージーヤ学院建設の際にも、ハーンカーフ＝アルバッラートの時と同様に、シア派住民による破壊活動が発生した。設立者のバドル・アッダウラ・スライマーンは、ワクフを設定するとともに、建設に対する反対運動を抑えにかかった^⑪。彼はハラブ住民の有力者達(cawizh)を詰問したり、内城の守備隊を建設現場に配置して、建築を続行したが、反対派は夜襲をかけて兵士を殺害し妨害活動を続けた。そこでバドル・アッダウラは、シャリーフのズフラ・ブン・アリー^⑫に賜衣などを与えてマドラサの保護を請け負わせた。彼が立ちをはかると、反対派もマドラサに近づけなかったという。しかしその後、破壊活動が再発し、ハラブの名望家(ma'raf)達が二五日間拘留されるに至った。おそらくこのような妨害活動のゆえであろう、建設工事はイマード・アッディーン・ザンギーの治世になるまで完了しなかった^⑬。一方、シャラフ・アッディーンは、このマドラサの教授とナーズイル(管理者)に就任し、以後アジャミー家は、これらの職を独占すべく努力を重ねることになる。

ハラブ最初のハーンカーフとマドラサは、両施設とも支配者が設立しシア派住民の反対を押し切って建設されたという経過を辿った。スナ派法学の教育施設であるマドラサだけでなく、スーフィーの拠点であるハーンカーフの設立もシア派住民から反対を受けたことは興味深い。

第二節 ザンギー朝前半期

五一八／一二四・二五年にマウスィル(モースル)を領有したブルスキー家は、当主アク・スンクル(Aq Sungur al-Bursuqi)の暗殺に続いて、その息子マスウード(Mas'ud)も急死したことによって、五二一／一二七年に事実上断絶した。同家に代わってマウスィルに任命されたのがイマード・アッディーン・ザンギー^⑭である。彼はセルジューク朝スルターン＝マフムード二世の息子ファッルフ・シャーフ(Farruh Shah)とアルプ・アルスラン(Alp Arslan)を伴って、同年マウスィルに入った。こうして、以後約一世紀にわたって存続するザンギー朝が成立することになった。

五一八／一二五年にハラブもブルスキー家の支配下に入ったが、同家の断絶後は、混乱状態が続いていた。イマード・アッディーンが派遣した軍隊は、五二一／一二七年末にこの混乱を収め、ハラブはザンギー朝の領土に編入された^⑮。

ザンギー朝が大きな勢力を誇った期間は約半世紀に過ぎないが、イクター制をはじめとするさまざまな制度や慣行などについて、セルジューク朝と後のアイユーブ朝をつなぐ存在として常に言及される。しかし実のところ、ザンギー朝自体の施策については、あまり具体的に

は論じられてこなかった^④。王朝の創始者であるイマード・アッディーン・ザンギーについても、十字軍勢力との戦いやセルジューク朝の内部抗争への参加といった軍事面での活躍はよく知られているが、内政面で彼が採った政策に関しては系統だった研究は見当たらない^⑤。その一方で、スンナ派の復興に力を注いだという評価だけが、明確な根拠もないまま示されている [Elisséeff 1967:287-288]。

また、イマード・アッディーンの子でシリア地方の領土を継承したヌール・アッディーン・マフムード^⑥は、父と同様に十字軍勢力に対して戦いを挑み、イスラーム世界の失地回復を進めたことで知られる。また宗教政策に関しては、宗教施設の設立・整備やウラマーやスーフィーを手厚く保護したことでも有名である。エリセエフは、聖戦を促進し民衆の支持を保つために、ヌール・アッディーンは正統派たるスンナ派の信条と法の普及に努めたとして、マドラサなどの宗教施設の例を挙げて論じている [Elisséeff 1967:750-779]。またハリールによれば、ヌール・アッディーンはハナフィー派を奉じていたが、一派に偏ることなくウラマーを支援し、ハディース学を中心とするイスラーム諸学の発展を促したという [Hafli 1980:132, 140]。

ザンギー朝やヌール・アッディーンの業績を総合的に評価するならば、このようになるであろう。しかしながら、シア派の街ハラブを支配しなくてはならないという事実に向直した時、ザンギー朝の君主達は、スンナ派優遇策を強引に推進しようとはしなかったのである。

(一) イマード・アッディーン・ザンギー

ハラブを征服してから五四一／一一四六年に暗殺されるまでの約二

十年間に、イマード・アッディーンがハラブにおいて実施したことが判るスンナ派優遇策は、ザッジャージーヤ学院に対する支援のみである。イマード・アッディーン自身はハラブに新しい学院を設立してはいない。本拠地であったマウシルにさえ彼自身が設立したマドラサは見当たらないから [al-Daywānī 1957]。ヌール・アッディーンら息子達以降の世代に比べて、彼はマドラサに対する関心が低かったのかも知れない。ただし以下に示すように、彼はマドラサをまったく顧みなかったわけではない。

先に述べたとおり、ザッジャージーヤ学院の建設は、イマード・アッディーンの治世になってようやく完了した。しかし同学院への妨害活動は続いたらしく、多くの木材を運び込んだ上で放火するという事件が生じている。この事件の後、学院のナズィルであったシャラフ・アッディーン・アブド・アッラフマーンは、ザンギー朝の高官イブン・アッタルス・スィー^⑦に願い出て、五二五／一三〇・三一年にイマード・アッディーン之父カスィーム・アッダウラ・アク・スンクル^⑧の遺骨をマドラサの北側に移葬した。これは、その遺骨の存在ゆえにマドラサに危害が加えられないことを期待してのことであったという^⑨。

さらに、イマード・アッディーンは、父のこの墓廟のためにワクフを設定し、その墓前で『コーラン』を読誦する者のための費用を賄うよう規定し、また読誦のために滞在する者の部屋を設けた^⑩。イマード・アッディーンが実施したことは父の墓廟の整備ではあるが、以上の経緯が示しているとおり、ザッジャージーヤ学院への支援をも目的としていたと思われる。さらに、一時期同学院が、アク・スンクルの

ラカブをとってカスィーミーヤ (al-Qasimīya) 学院と呼ばれたり、イマード・アッディーンにちなんでイマードィーヤ (al-Imādiyya) 学院と呼ばれたという事実を鑑みると [TDM 1:162a] このマドラサそのものに対しても、イマード・アッディーンがワクフ財源の追加などの支援策を実施した可能性も考えられる。

このように、ハラブにおけるマドラサの発展には多少なりとも貢献したイマード・アッディーンであるが、アザーンの変更には手をつけおらず、直接ハラブのシーア派を抑圧したという記録は見当たらない^⑧。これらの事例を見る限り、イマード・アッディーンはスンナ派に肩入れする態度を見せてはいるものの、シーア派が優勢なハラブにおいてスンナ派優遇策を強力に推し進めたとは言えないようである。

(二) ヌール・アッディーン・マフムード

五四一／一一四六年にイマード・アッディーンが暗殺されると、ザンギー朝国家はジャズィーラ地方と北シリア地方の二つに分割され、ハラブを首都とする北シリアは、次男のヌール・アッディーン・マフムードが手に入れた [Elisséeff, N. "Nūr al-dīn..." ET²]

ヌール・アッディーンがハラブのアザーンをスンナ派の様式へ改めたことのある程度詳しく扱っている研究として、Elisséeff 1967 と Klayat 1971 の二点が挙げられる^⑨。エリセエフの研究はヌール・アッディーンの業績を網羅した著書であり、この事件については三頁を割いているだけである [四二八―四三〇頁]。それに対してハヤトの研究は、十二世紀のハラブのシーア派の動向に関する専論だけに記述は詳細である。両者とも主な情報源としてスンナ派の史家による

DTD と ZH¹ およびシーア派側の情報を含む TDM を用いており、事件の推移については大筋で同じ内容となっている。しかしながら、この事件に対する評価や背景に対する両者の見解には、くい違いも見える。以下では、まず史料で確認しながら経過の概要を紹介したうえで、両者による見解の相違に対する私の意見を示すことにする。

五四一年四月十日／一一四六年九月十八日にハラブへ入ったヌール・アッディーンに対して [ZH 2:289] 「ハラブのスンナ派の一团とカーディー・イブン・アッシャフラズリー (Ibn al-Sahrazūrī) およびイブン・アッタルスूसィーがハラブ人達のことについてなにがしかを語ったが、ヌール・アッディーンは受け入れなかった [TDM 2:159b]」と伝えられている。遠回しな言い方ではあるが、

この後の展開から考えて、ハラブのシーア派に対して遠慮することなくスンナ派優遇策を進めるよう要請がなされたが、この時点ではヌール・アッディーンはそれを拒んだと考えられる。

その後中部シリアを支配するムイーン・アッディーン・ウヌルの娘をヌール・アッディーンが娶ることになり、婚約のための使節としてイブン・アッタルスूसィーがディマシュクへ派遣された。彼は当時ディマシュクに滞在していたハナフィー派法学者ブルハーン・アッディーン (Burhān al-Dīn 'Alī al-Balḥī) と語り、ヌール・アッディーンがシーア派に寛容な態度をとっていることを非難する使節を送ることに決めた。そこでイブン・アッタルスूसィーは、花嫁の父であるウヌルに対して働きかけ、親シーア派の態度を改めることを結婚の条件とさせることに成功した。彼らはハラブへ戻ってウヌルの書簡を示し、改めてスンナ派優遇策を進めるようヌール・アッディーンに要

求した。そこでヌール・アッディーンは、シーア派のアザーンをジャミーのミナレットでおこなうことなどを禁じ、自らはスンナ派であることを表明した。そして無事結婚が成立し、五四一年十一月／一四七年四・五月にムイーン・アッディーンの娘がハラブへ輿入れした【TDM 2:159b-160a】。

以上の情報は、ハラブのシーア派の見解を伝えるイブン・アビー・タイイの記述に拠るものである。ところが、ヌール・アッディーンと同時に代人でディマシュク在住のイブン・アルカラニスィーは、その著作 dTD の中で、ハラブのアザーン変更を五四三／一四八八年の出来事として伝えている。すなわち、この年の七／十一・十二月にヌール・アッディーンがハラブにおけるアザーンからシーア派特有の文言を削除し、また教友達を中傷することを禁止したという情報がハラブから伝わってきたと記しているのである。^⑤

一方イブン・アビー・タイイによれば、ヒジュラ暦五四三年には以下のような事件が生じた。この年、ヌール・アッディーンとブルハーイン・アッディーンとのシーア派弾圧が激しさを増し、彼の父アブー・タィイ (Abū Tāyī) を含むシーア派の指導者達が内城の塔に拘留された。さらにヌール・アッディーンがこのシーア派指導者達を追放するように命じると、彼らはスンナ派の法学者と論争する場を与えるよう求めた。しかしこの願いは聞き入れられず、集団でアーシューラーの行事をおこなったことを理由に、ハラブの有力者は一族とともにマウシルへ追放されたのである【TDM 2:195a-b】。

このように、ハラブのシーア派が伝える史料によれば、ヒジュラ暦五四一年にアザーンの変更が命じられ、五四三年にはシーア派指導者

の国外追放が断行されたことになる。アザーンが変更されたのは、五四一年と五四三年のいずれであろうか。この史料間のくい違いを含め、以上のシーア派弾圧事件について、先行研究では以下のように説明されている。

エリセエフは、ヒジュラ暦五四一年の事件には一切言及せず、dTD 等に依拠して五四三年にアザーン変更などのシーア派弾圧がおこなわれたとする。そのうえで、この直前にヌール・アッディーンがアンターキーヤ (アンティオキア) 東方のヤグラ (Yagra) で十字軍勢力の奇襲を受けて敗退したことがハラブのシーア派住民の不満を招き、それがこの弾圧の直接的な原因となったとしている【Eliseeff 1967:428】。エリセエフは、TDM に見えるイブン・アビー・タイイの記述を見落としているようだが、その点を除いても、彼の議論は推量の積み重ねが多く説得力に欠ける。

ハヤトは、史料間の矛盾に見える点を以下のように解釈している。すなわち、ヌール・アッディーンは政略結婚のために五四一年にスンナ派優遇＝反シーア派を宣言したものの、この宣言は実行に移されず空文化していた。それが五四三年になって断行されたと考えるのである【Khayat 1971:179-180】。

一方の情報を見無視してしまう積極的な理由が無い以上、ハヤトのような解釈が妥当であると思われる。五四一年に一旦打ち出されたスンナ派優遇策は、結局実施されなかったか、あるいは実施されてもすぐに撤回されたのであろう。そのため、ディマシュクまではこの動きが伝わらなかったか、イブン・アルカラニスィーが記録に値しないと判断したのではないだろうか。そして、五四三年になって、アザーン

窓 変更と有力者の追放というシーア派弾圧が決行されたと考えられるの

である。

史

このように考えれば、先に示した史料間のくい違いは何とか説明がつく。しかしながら、それではなぜヌール・アッディーンは、五四一年にスンナ派優遇策を打ち出しておきながら、五四三年まで実行に踏み切らなかった（あるいは、踏み切れなかった）のだろうか。この点については、ハヤトも説明していない。この疑問に答えるためには、ヌール・アッディーン政権を取り巻く諸状況を考慮に入れて考察する必要があるだろう。ここでは結論を急がず、以下の検討を踏まえたうえで、第三章で私の解釈を示すことにしたい。

第二章 推進派の顔ぶれ

前章で見たように、シーア派が多数を占めるハラブにおけるスンナ派優遇策の実施は、当然住民の反発を招き、騒乱状態を引き起こすこともあった。しかしながら、支配者に対してスンナ派優遇策の実施を積極的に働きかけた人々の姿が見られたのも事実である。住民の多数が反対し支配者も渋る施策の推進を主張した者達とは、一体どういう人々だったのであろうか。

まず、ザッジャージーヤ学院の創設を進言して自らその要職を占めることに成功したシャラフ・アッディーン・アブド・アッラフマーン①の属するアジャミー家は、十一世紀半ばにイランのニーシャープールからハラブへ移住してきたシャーフイー派を奉じるウラマーの家柄である。同家は、ザッジャージーヤ学院の教授職とナーズィル職だけでなく、後にワズィール（宰相）を二人も出すなど、ザンギー朝下で

急速に勢力を拡大した「谷ロ一九九六・七六―七九頁」。

同学院にイマード・アッディーン②の父アク・スンクルの遺骸を埋葬してほしいというシャラフ・アッディーン③の申し出を取り次いだアブー・マンスール・ブン・アッタルスースイーは、ハラブにおけるディーワーン④の長官としてザンギー朝に仕える有力官僚であった。彼はヌール・アッディーンの下では特に力を持ち、幾つものワクフの管理を任されていた [ETD:3817。五一七/一二三年、アジャミー家とともにザッジャージーヤ学院の創設者バドル・アッダウラ・スライマーンを支持してシーア派のハッシャープ (al-Hasshib) 家と対立した勢力の中に、タルスースイー家という家名が見える [TDM 1:189b-190b]。アブー・マンスールは、同家に属する有力者であったと思われる。またアザーンの変更の際に活躍したイブン・アッタルスースイーも同一人物であろう。

アザーンの変更に関わった人物のうち、カーディーという肩書きを持つイブン・アッシャフラズリーは、ザンギー朝下で影響力を誇ったウラマー家系であるシャフラズリー家の成員と思われる。同家は家名が示すように、もともとイラク北東部のシャフラズール出身の家系で、イマード・アッディーン⑤の Mausil 入城時からザンギー朝を支えてきた。シャーフイー派法学者を多数輩出した同家は、ジャズイーラとシリヤ双方のザンギー朝政権の下で、カーディーや大カーディーを数多く送り出した。

また、ディマシュクに居ながらヌール・アッディーン⑥の親シーア派政策を批判していたブルハーン・アッディーン・アリー・バルヒーは、ホラサーン東部のバルフ出身で、イマード・アッディーンとも親

交のあったハナフィー派のウラマーである。彼は、五二五／一三一年頃からディマシュクのマドラサで教えていたが、アザーンの変更と同時期にヌール・アッディーンがハラブに設立したハッラーウィーヤ学院 (al-Madrasa al-Hallāwīya) の初代教授に迎えられた。

ここに見えるウラマー及び家系の名は、いずれも五／十一世紀末まではハラブ関係の史料には現れないものである。タルススィー家がいつ頃ハラブへ到来したかは不明であるが、十一世紀半ばにハラブへ到来したというアジャミー家とともども、十一世紀末までは無名の家系であったと考えられる。シャフラズリー家やブルハーン・アッディーンに至っては、ザンギー朝の進出と前後してシリアへ足を踏み入れた新参者と言うことができる。また彼らは、ザンギー朝の君主が設立あるいは支援したマドラサに職を得たり、有力官僚として君主に仕えた人物であるという点で、支配権力と強いつながりを有する者達であった。

以上の人々に比して、ハラブにおける古くからの名家であるアブー・ジャラーダ (Abū Jarād) 家は、ハナフィー派法学を奉じる家系でありながら、一連のスンナ派優遇策に対してあまり積極的には関与していないようである。この期間に見られた彼らの行動としては、アジャミー家とタルススィー家とともに、ザッジャージーヤ学院の創設者バドル・アッダウラ・スライマーンの支持を表明したことだけである [TDM 1:189b-190b]。アブー・ジャラーダ家のカマル・アッディーン^⑤が父などから得た伝承も交えて著したハラブ史である NH にも、この時期のスンナ派優遇策と同家の関わりは記されていない。また、積極的なスンナ派優遇策推進者であったアジャミー家のシャラ

フ・アッディーンは、五二〇／一一二六・二七年にハッシャープ家から命さえ狙われているが「谷ロ二〇〇一・一三八頁」、アブー・ジャラーダ家とハッシャープ家が鋭く対立したという記録は見当たらない^⑥。むしろ両家は、ハラブが十字軍勢力の攻勢に晒された十二世紀初頭の危機に際して、故郷を救うために宗派の別を超えて協力し、行動したのである「谷ロ一九九六・八九頁」。このようなアブー・ジャラーダ家の動向を勘案すると、ハラブ住民の間に宗教的な対立を招きかねないスンナ派優遇策を、同家が積極的に推進しようとしていたとは思えない。

以上のように、最初期のスンナ派優遇策を積極的に支持した勢力の中心が、ハラブへ到来して日の浅いウラマーや新興の家系であったことは注目に値する。彼らが地元に必要な影響力を持つ旧来の名家と互していくためには、支配者の力が是非とも必要であったのだろう。新興あるいは新参のウラマー達が自分達の立場の正統性を示し、活動基盤を確立して影響力を強めていくためには、スンナ派優遇策の遂行は必須であったと思われる。言い換えれば、スンナ派優遇策の導入を積極的に働きかけた人々は、この時点ではハラブ住民の間に大きな影響力を持っていた人々ではなかったと考えられるのである。

第三章 ザンギー朝君主の選択

ここまで見てきたように、スンナ派優遇策推進を主張するウラマーと大多数のハラブ住民の反対との板挟みになった支配者達は、住民の支持を確保しながらスンナ派優遇策の遂行を試みなくてはならないという困難な状況に置かれていた。多くの支配者が住民の支持を失い、

窓 支配権を失っていった中であって、最終的に国家の維持拡大とスンナ派優遇策の遂行の双方を実現したザンギー朝の君主達は、どのように事態を乗り切っていたのであろうか。本章では、ザンギー朝の二君主が採ったハラブ住民への周到な懐柔策について検討するとともに、

史 彼らの行動の背景を国家戦略全体を視野に入れて考えてみる。

第一節 シーア派住民の懐柔

ザンギー朝以前にスンナ派優遇策を打ち出した支配者達については、彼らとシーア派住民の関係を示す情報はほとんど無い。しかしながら、彼らは三人とも、住民を巻き込んだ反乱や騒乱に遭って短期間でハラブの支配権を失っている。

前章で見たように、シーア派の抑圧を試みたトゥグティギンは、ハラブ住民の反抗に遭って、不本意にハラブを去らねばならなかった。また、ハーンカーフ＝アルバット建設を強行したルウルウは、その二年後の五一／一一七年に、ライース＝サーイド・ブン・バディ（al-ra'is Sa'id b. Badi）の反乱を抑えきれず、ハラブから逃亡した【谷ロ一九九八：三八頁】。ザッジャージーヤ学院の設立者であるバドル・アッディーンも、マドラサを設立して二年後の五一七／一一二三年に、彼を見限った住民が招いたヌール・アッダウラ・バラク（Nur al-Dawla Balak）によってハラブを追われた【谷ロ二〇〇一：一三四頁】。これらの事件は、さまざまな要因が重なって生じたものであるが、彼らがハラブの住民から十全な支持を取りつけていなかったことは読み取れるだろう。

では、ザンギー朝の二人の君主はどうであらうか。実は興味深いこ

とに、自らもヌール・アッディーンの弾圧を受けたシーア派のアブー・タイイが、両者のシーア派に対する態度を以下のように肯定的に伝えているのである。^④

ヌール・アッディーンは、最初は彼の父（イマード・アッディーン）の考えに則って、ハラブの人々を寛容に扱い、彼らの自由になせ、ジャーミイの東部分での礼拝で彼らのマズハブ（シーア派）を表明し、「いざや最良の務めのために来たれ」というアザーン（アザーン）をハラブの「マスジドの」ミナレット、ジャーミイと内城の「ジャーミイ」のミナレットからおこなわせ、彼らを尊重した。

【TDM 2:159a】

このように、イマード・アッディーンと、ハラブに入った当初のヌール・アッディーンは、基本的にハラブのシーア派を放任する方針を採っていたのである。実際、イマード・アッディーンの治世には、シーア派の名家ハッシャーブ家が依然として住民の代表として振る舞っていた。^⑤ 五三四／一一三九・四〇年には、ハラブ住民から戦費を調達しようとしたイマード・アッディーンの命令を、ハッシャーブ家の当主アブー・アルハサン・ヤフヤー（Abu al-Hasan Yahya）が住民の訴えを受けて非難している【谷ロ一九九六：八五頁】。

その五年後の五三九／一一四四・四五年、イマード・アッディーンは、ハラブから首都マウスィルへ戻る際に、シャリーフのズフラ・ブン・アリーらとともにヤフヤーを同行させている。^⑥ このズフラは、前章で見たように、ザッジャージーヤ学院建設に反対するシーア派住民の妨害に対処するために、バドル・アッダウラがその権威を利用した人物である。イブン・シャッダードによると、ズフラは「有力なシャ

リーフ達、見識と高貴な血統と權威の持ち主達の一員であり、その街における指導者として人々が彼の命令と禁止に従う [AH:97] という存在であった。

イマード・アッディーンは彼らを大切な客人として遇したようである。ヤフヤーはマウスィルに着くと彼のために準備された館に住まわされた。そしてイマード・アッディーンは、王朝の要人達に命じてヤフヤーを訪問させ、また自分の女奴隷を彼に与えている [AH:36]。ズフラについてはよくわからないが、同様のもてなしを受けたと思われる。

このような行動をとったイマード・アッディーンの意図としてまず考えられるのは、ハラブの有力なウラマーやシャリーフといった宗教權威を味方に取り込むことであろう。しかし彼の目論見はそれだけではなかったように思われる。というのも両者の滞在期間が長すぎるからである。ヤフヤーがハラブに帰ったのは、五四一／一一四六年にイマード・アッディーンが暗殺されてからのことであつた [AH:36]。ズフラはその前年にマウスィルで客死しているのである [AH:97]。客として厚遇しているとはいえ、彼らを二年間にわたってマウスィルに留め置いたというイマード・アッディーンの行動の裏には、ハラブ住民に対して大きな影響力を持つ両者を現地から引き離しておく狙いもあったと推測される。また、以上の点に関連して重要なことは、シア派指導者のヤフヤーと、マドラサ建設に協力したズフラとを同様に扱っているということである。イマード・アッディーンにとって、宗教的な權威を備えているという点で、両者とも等しく重要な存在であつたと考えられる。

五四一／一一四六年、新しい支配者として到来したヌール・アッディーンは、ハラブへ入る前に、郊外にあるマシュハド・アッディッカ^②と呼ばれる廟に立ち寄って数日を過ごし、詩ならびに自分と父の名を自ら壁に記した [TDM 2:158a-b]。この廟は、そこにフサイン・ブン・アリーのムハッスィンという息子が眠っているとされており、ハラブの住民にとっては身近な参詣の場であつた^③。また、ハッシャーブ家のヤフヤーがマウスィルから帰還し、徒歩で挨拶に訪れた際には、ヌール・アッディーンも同じく徒歩で彼を出迎えた [AH:36]。ヌール・アッディーンが徒歩で出迎えたのは、ヤフヤーに対して敬意を表するためであろう。

さらに、前章で見たように、ヌール・アッディーンがアザーン変更を断行した経過を伝えるイブン・アビー・タイイは、スンナ派ウラマーなど推進派の活動を強調する一方で、ヌール・アッディーン自身は当初シア派弾圧に乗り気でなかったとしている。

以上のように、イマード・アッディーンとヌール・アッディーンは、スンナ派優遇策を実施しながらも、地元のシア派に対する配慮を欠かさなかつたのである。両者をスンナ派の積極的な擁護者と評価しているエリセエフは言及しないが、^④彼らのスンナ派優遇策の意味を正しく捉えるためには、無視してはならない点であろう。

第二節 国家戦略とスンナ派優遇策

この時期にハラブや北シリアを治めた支配者のほとんどは、形式上はアッバース朝やその保護者を自任するセルジュク朝から支配権の承認を受けていた。したがって、そのような政権が反シア派「スンナ

派優遇策をとるべきであるという圧力は当然かかってこよう。しかし現実問題として、シーア派住民が多数を占めていたハラブでスンナ派を利する政策をとれば、当然住民の反発が予想される。英明な君主であるならば、たとえスンナ派こそが正統なイスラームであると信じていても、多数派住民に反対されるような政策をむやみに推し進めることはないであろう。

先に見たとおり、ザンギー朝の二君主は、十二世紀初頭にスンナ派優遇策を強行して混乱を招いた先人の轍を踏まぬよう、ハラブのシーア派に対しては慎重に対処していた。イマード・アッディーンは北シリアに進出したものの、王朝の本拠地ジャズィーラ地方と北シリアの間には、治世の末期に至るまで、十字軍勢力の築いたエデッサ伯国が存在していたし、西からはアンティオキア公国がハラブを狙っていた。このような環境を考えると、イマード・アッディーンにとって北シリアの中心都市ハラブの戦略的な重要性は明白である。一方、ハラブは首都マウスィルから遠く離れた一地方都市であり、その地での宗教政策が国家全体に及ぼす影響は大きくはなかったであろう。

このような状況を考えたうえで、イマード・アッディーンはハラブにおけるシーア派の存在を黙認し、スンナ派優遇策の推進よりもハラブの確保を優先したと考えられる。しかし、ともすれば自立的な傾向を強める住民の動きを封じるために、住民の間に大きな影響力を持つハッシャープ家当主らをハラブから引き離し、首都マウスィルに留め置いたのであろう。その際も、彼らを客人として厚遇することによって、住民の反発を極力招かないような配慮がなされたと考えられる。

父から国の西半分を受け継いだヌール・アッディーンの場合はどう

であろうか。即位したばかりの彼にとって、ハラブは自国の首都であり、このことが父以上に難しい選択を彼に迫ることになった。まず、ハラブの確保が父の場合以上に重要であったことは言を俟たない。ハラブへ入った当初の親シーア派的な態度は、何を措いてもハラブ住民の支持を取りつけないてはならないヌール・アッディーンにとって、当然の行動であった。

しかし一方で、君主が座す首都での宗教事情は、国家全体の方針や君主自身の信仰と結びつけて論じられることになる。ディマシュクとの関係を安定させるため、そしておそらくはその併合をも睨んで、ヌール・アッディーンは、ディマシュクの支配者ムイーン・アッディーンの娘を嫁に迎えることにした。スンナ派優遇策の推進派は、この機会にディマシュクの支配者も巻き込んで、ヌール・アッディーンに決断を迫ったのである。この政略結婚を成立させたいヌール・アッディーンは、スンナ派優遇策の採用を宣言したが、おそらく完全には実施しなかった。当然、シーア派住民の反対を恐れてのことであろう。

しかしながら、治世三年目の五四三／一一四八年を期して、彼はスンナ派優遇策の本格的な推進に取りかかったのである。では、最初の宣言から二年を経たこの時期にヌール・アッディーンがスンナ派優遇策の断行に踏み切った理由は何であろうか。この間のハラブ政権を取り巻く状況の変化を考慮に入れながら、第一章の最後に提示したこの問いに対する答えを考えていくことにしよう。

イマード・アッディーンは治世末期の五三九／一一四四年にエデッサ伯国を滅ぼし、ハラブの北東から十字軍勢力が駆逐された。五四一／一一四六年にイマード・アッディーンが暗殺された混乱に乗じて、

ジョスラン二世がエデッサを取り戻そうとした。しかし、この動きを抑えたヌール・アッディーンは、逆に翌年アンティオキア公国領の一部を奪うことにも成功したのである [KT 9:342, 348]。

しかし、エデッサ伯国の滅亡を受けて、ヨーロッパでは第二回十字軍が召集された。皇帝コンラート三世とフランス国王ルイ七世に率いられた軍勢は、苦勞を重ねた末、一一四八年の春にシリアへたどり着いた。彼らは、七月にディマシクを包囲したが、ムーイン・アッディーンの奮戦と策略によって十字軍勢力は囲みを解き撤退した。そして九月にはコンラートが、翌年の春にはルイが聖地を後にし、第二回十字軍はさしたる成果もあげることなく解散した [Mayer 1972:102-104]。

第一章で見たように、ハラブにおけるアザーン変更は、この年のヒジュラ暦七月すなわち西暦十一・十二月に断行された。つまり第二回十字軍の脅威が去った後ほどなくしてのことである。十字軍勢力の勢いが押しとどめられたことで、ヌール・アッディーンには、いよいよディマシク併合という次の目標が現実味を帯びて見えてきたことであらう。さらに、シリア統一からファティマ朝の打倒までを視野に入れて考えるならば、スンナ派の擁護者であることを明確に示すことは必須である。こうして、ハラブの地方政権から領域国家へと脱皮を図るヌール・アッディーンにとって、ハラブにおけるスンナ派優遇策の遂行は避けがたいものとなっていたと思われる。また、この第二回十字軍の撤退によって生じたイスラーム側優位での小康状態は、内政面で強行策を採る余裕をヌール・アッディーンに与えたと思われる。以上のような対外情勢などさまざまな要素を熟慮した結果、ヌー

ル・アッディーンは、絶妙の時機を狙ってスンナ派優遇策への転換に踏み切ったのではないだろうか。

このアザーン変更と前後して、ヌール・アッディーンやその家臣達が次々とマドラサを設立し、ヌール・アッディーン政権はスンナ派護持とイスラーム諸学保護の立場を鮮明にしていく。そして、アザーン変更から六年後の五四九/一一五四年、ヌール・アッディーンはついにディマシク征服を果たすのである。

おわりに

以上のように、この時期のハラブにおけるスンナ派優遇策は、さまざまな政策との関連を配慮しつつ慎重に進められていった極めて政治的な施策であった。一方、スンナ派優遇策を支持した者達は、政治権力の後ろ盾を得ることで、旧来のウラマー名家が影響力を誇るハラブに自分達の基盤を築いていこうとしたのである。ここには既に支配者とウラマーの協力関係が見られるが、積極的に支配者に接近したのが、新興家系や新参のウラマーであったということは重要である。この時期のスンナ派優遇策をめぐる問題には、シーア派對スンナ派の争いだけではなく、ウラマーの新旧勢力の争いという面もあったのである。

ヌール・アッディーンがスンナ派優遇策の推進を決断したということとをこのような観点から捉え直すと、この政策は、彼が旧来のウラマー家系から新興勢力へと支持基盤の重心を移動させたことの現れであると考えられよう。ハラブ支配を確実にするために地元有力家系の支持を取りつけることが必要であるが、支配の貫徹を目指すのであれ

ば、いずれは現地に根を張る有力家系を屈服させなくてはならない。彼らに代わって、支配者が設立したマドラサや官職を抛り所とする新興ウラマー達の力が増せば、権力による宗教勢力の統制は一層容易になる。このような計算がヌール・アッディーン的心中にあったのではないだろうか。事実、ディマシュク併合を果たしたヌール・アッディーンは、司法制度の中央集権化を目指し、五五七/一一六一・六二一年、一世紀以上の間ハラブのカーディーを出し続けてきたアブー・ジャラーダ家からこの職を奪い去り、王朝とともに歩んできたシャフラーズリー家の人物をハラブのカーディーに任命したのである〔谷口一九九九・八頁〕。

シーア派が多数を占めたハラブにおいては、スンナ派優遇策の導入にあたって、支配者や推進派と地域住民の対立が明瞭に現れた。しかしながら、アブー・ジャラーダ家の例から解るように、この対立を宗派対立という面から捉えるだけでは不十分である。とすれば、もともとスンナ派が優勢であったディマシュクなど他の都市でも、スンナ派優遇策の導入に際して、程度の差はあれ同様の軋轢が生じたことが考えられよう。ハラブと他の地域との比較検討は、今後の課題としたい。

註

① このような見解に基づく代表的な研究として、Lapidus 1976 が挙げられる。本書はマムルーク朝時代のシリアを主な対象としているが、著者は、このような政権の在り方は十一世紀以降のイスラーム世界各地に広く見られたとしている〔六一七頁〕。またラッバトは、ザンギー朝からマムルーク朝にかけて「公正の館 (*dar al-'adl*)」という施設が建設された理由を考察するに当たって、同様の意見を述べている [Rabat 1995: 18-22]。

ザンギー朝・アイユーブ朝時代のディマシュクに関しても、このような支配者とウラマーの関係が指摘されている〔三浦一九八七・九九五頁〕。

② 以後特に断らない限り、本稿で「シーア派」といった場合、十二イマーム派を意味する。

③ Sayf al-Dawla 'Alī, 三三三/九四五年から三五六/九六七年に没するまでハラブを支配した。

④ ハヤトは、親十二イマーム派のハムダーン朝が三三三/九四五年にハラブを獲得した際に住民が抵抗しなかったことから、この時点ですでに同派が多数派であったとする [Khayyat 1971: 169]。

⑤ ZH: 1172. ただし導入された年についてははっきりせず、ZHの著者イブン・アルアディームは三五八/九六八・六九年、三六七/九七七・七八、三六九/九七九・八〇年の三通りの説をあげている。またサイフ・アッダウラの治世である三四七/九五八年にすでに導入されていたという説もある。なお、あからさまにアリーを持ち上げるこの挿入句の後半部分は、シーア派のアザーンとしても一般的ではない。通常は前半部のいわゆるハイアラ (*hay'ala*) だけが挿入される [Madelung 1971: 153, n. 117]。

⑥ Taj al-Dawla (Taj al-Muluk) Alb Arslan b. Ridwan. 言葉が不由なだけでなく、行動にも問題があった。五〇八/一一一四年にルウルによって暗殺された [BT 4: 1984-1987]。

⑦ この事件の経緯については、谷口二〇〇一: 一三三頁を参照。

⑧ Zahir al-Din Tughtkin. ディマシュクのセルジュク朝君主ドゥッカークのフタヘクであったが、君主の没後実権を握った。五二二/一一二八年没。彼が建てたブリー朝は、五四九/一一五四年にザンギー朝のヌール・アッディーンによってディマシュクを征服されるまで、ザンギー朝と十字軍勢力を相手にシリアの覇権をめぐって争った。

⑨ Lu'lu' al-Yayā. セルジュク家のハラブ君主リドワーンに仕えていたハーディムで、父を継いで即位したアルブ・アルスランにも仕えたが、五〇八/一一一四年に君主を暗殺してハラブの支配権を握った [BT 4: 1984-1987]。

⑩ ザッジャール・ジャヤ学院の設立時期については、史料間で微妙なずれがある。シーア派の反対運動などを詳しく伝える TDM はヒジュラ暦五一五

年の項に一連の記述を収めている [TDM 1:162a]。ハラブの地誌である AH は、五一六年に建築が始まったとする一方で、壁には五一七年という碑銘があると伝える [AH:96]。シーク派住民による妨害活動によって幾度となく建物が破壊されたことが、このような情報の混乱の一因と思われる。

⑪ 街区名をそのままに Madrasat al-Zajjajiyin と呼ばれることもあつた。

⑫ Saraf al-Din 'Abd al-Rahmān al-'Ajami. シーフイー派のウラマを輩出したアジャミー家の当時の中心人物。この人物については、谷口一九九六・七七―七八頁を参照せよ。

⑬ Badr al-Dawla Sulaymān. 十二世紀初頭にジャズイーラからシリア北部に勢力を伸ばしたアルトゥク家の一員。おじイルガーズイーのナリーブ（代官）として、五一五―一二二一年からハラブを支配した。イルガーズイーの没後もそのままハラブを支配したが、五一七―一二二三年に同家のヌール・アッダウラ・バラクによってハラブを追われた [谷口二〇〇一：一三四頁]。

⑭ バドル・アッダウラがワクフ財源として設定した農地 (*dāy'a*) の名は、*kiris* とある [TDM 1:162a]。おそらく *Karis* と読むのであろうが、位置は確認できなかった。

⑮ Zuhra b. 'Alī b. Muhammad b. Abī Ibrāhīm al-Ishāqī al-Husaynī. この人物は、五一八―一二二四年に十字軍勢力に包囲されたハラブの救援を求めるためにマールディーンへ赴いた使節団の中に見える *naqīb al-asāf Zuhra* であろう [谷口二〇〇一：一三五頁]。

⑯ 以上の記述は、TDM 1:162a を要約したものである。AH:96-97 にも同様の経緯が簡略に紹介されている。ただし、ズフラの名前が詳しく記されているのは後者だけである。また AH には、このマドラサの建築が終了するまでズフラが関与した (*bā'arā*) と記されている。なお、ザッジャージーヤ学院の建設をめぐるのは、Eddé 1991:63-64 と阿久津一九九三：三―六頁も参照せよ。

⑰ 'Imād al-Dīn Zankī. 在位五二一―五四一―一二七―一二四六年。

⑱ ザンギー朝による征服直前のハラブをめぐる政治状況については、谷口

二〇〇一：一三五―一三六頁を参照せよ。

⑲ 行政機構については、大稔によるまとまった研究がある。ザンギー朝の西アジア史における位置づけと同朝に関する研究史については、その論文の「はじめに」が簡にして要を得た紹介となっている [大稔一九八八：三一―三三頁]。

⑳ イマード・アッディーンに関する代表的な研究である次の二作品においても、このような傾向が見られる [Elisséeff 1967:293-388; Hall 1972]。

㉑ Nūr al-Dīn Mahmūd. 在位五四一―五六九―一二四六―一二七四年。

㉒ Abū Manṣūr b. al-'Aṣṣī. 肩書きは、ディーワンの長官 (*ẓāhib al-dīwān*) とある。ここであるディーワーンとは行政機構の「部局」という意味で使われていることは明らかだが、これだけでは役職の内容が判然としない。ザンギー朝の行政機構における諸ディーワーンの名称や職務内容については、まだよくわかっていない [大稔一九八八：三八頁以下]。

㉓ Qasīm al-Dawla Aq Sungur. 四七九―一〇八六年から四八七―一〇九四年の間、セルジュク朝のワリーとしてハラブを統治した。

㉔ TDM 1:162a, 2:26b. AH:97; ZH 2:242 にも同様の情報がある。AH と ZH の記述では、イマード・アッディーンがハラブを手に入れてすぐに父の遺骨を移したように読めるが、TDM がヒジュラ暦五二五年の項で述べているのは、この年代に従う。

㉕ TDM 1:162a. AH:97; ZH 2:242-243 にも同内容の情報があるが、部屋の情報が欠けている。ワクフ財源とされた農地 (*dāy'a*) の所在地は *ṣimr* と綴られている。おそらく *Ṣamir* と読むのであろう。位置は確認できなかった。

㉖ エリセエフは、イマード・アッディーンのスンナ派復興策として、同派を奉じるトゥルクメン遊牧民をハラブ地域に移住させたことを挙げている。しかし、それが彼の言うスンナ派復興とどのように関連しているのかという点については、明確に示されていない [Elisséeff 1967:387-388]。

㉗ 他に Madelung 1971:153 にも言及があるが、政治背景などの考察はなされていない。

㉘ Mu'īn al-Dīn Unur. ディヤシタク及びシリア中部を支配していたブリー朝のマムルークから身を起し、一二三〇年代後半からは実質的に政

権を担っていた人物【梅田一九七九：七二頁以下】。

- ②⑥ Ibn Abi Tayyir, Yahyā, 六三〇／一二三〇年頃没。彼の父アブー・タイハは、十二世紀のハラブにおけるシーア派有力者の一人であった。父からの情報を多く取り入れた彼の歴史書 *Ma'adin al-qahab* は、十二世紀のハラブのシーア派住民の動向について、他の史書に見られない情報を提供する。この書は散逸してしまったようだが、TDM など後世の史書に引用され、一部が現在まで伝えられている【Ahmad 1962:90-91】。

- ②⑧ Ibn al-Qalanisi, Hamza b. Asad al-Tamimi, 五五五／一一六〇年没。ディマシクのライースを輩出したタミム家に属し、自身もライースを務めた。DTD は、十一世紀半ばから著者の没年に至る「ディマシクとその周辺地域に関する年代記」【Ahmad 1962:84-85】。

- ②⑩ DTD:301. ZH も五四三年にマザーン変更があったと伝える【ZH 2:293-294】。

- ②⑫ Fabr al-Din Abū Mansūr Muhammad b. 'Abd al-Samad Ibn al-Tarsusi, 五四九／一一五四年没【RD:250; Khayat 1971:179, n.2】。本稿注②⑥を参照せよ。

- ②⑬ Sahazir, キルクークの東南東約一五〇キロメートルに位置する。

- ②⑭ ここに名前の挙がっている人物は個人名を特定できないが、ハヤトは、後シリアの大カーディーとなる Kamāl al-Din Muhammad b. 'Abd Allāh Ibn al-Sahrazuri に比定している【Khayat 1971:179, n.4】。その可能性は高いものの、シャフラーズリー家はこの時期に複数の人物がカーディーとして活躍しているので、これだけの情報では特定し難い。シャフラーズリー家については、Madlung 1971:156, n.127 を参照せよ。

- ②⑮ Burhān al-Din 'Alī b. Muhammad al-Balghī, 五四三／一一四八・四九一年にハラブのハッラーウヤー学院の教授に任命される。数年後辞任してディマシクへ戻り、そこで五四八／一一五三年に没した【Sourdel 1951:103; Madlung 1971:148-149, 152-153】。

- ②⑯ アブー・ジャラーダ家は三／九世紀にハラブへ到来し、五／十一世紀前半から一世紀以上にわたって、ハラブのカーディー職をほぼ独占した。同家については、谷ロー一九九六：六四一七四頁および谷ロー一九九九：七七八頁を参照せよ。

- ②⑰ Kamāl al-Din 'Umar, Ibn al-'Adim, Ibn Abi Jarāda, 五八八／一六六〇／一一九二—一二六二年。ハラブのフィエーブ朝政権の下で外交使節などとして活躍した。この人物については、谷ロー一九九六：七三三七四頁を参照せよ。

- ②⑱ 両家間の紛争としては、互いに隣接して所有する農地の境界線について双方の主張がくい違い、君主リドワーンが裁定を下したという出来事が知られているが、暴力事件にまで発展したという記述はない【BT 8:3662】。このことは、ハヤトも指摘している【Khayat 1971:178】。

- ②⑲ ハッシャーブ家については、谷ロー一九九六：八三—八七頁を参照せよ。

- ②⑳ AH:97. 二人の他、Taz al-Din Abū 'Abd Allāh Muhammad b. Ismā'il b. al-Halabi という人物も同伴しているが、この人物については不詳である。

- ㉑ Mashad al-Dikka, ハレブ旧市街西側のジャマシヤン山に現存する。三五一／九六二・六三三と al-Mubassin b. al-Husayn b. 'Alī b. Abī 'Talīb なる人物の墓が「発見」され、廟が建立された【AH:48-50】。

- ㉒ エリセエフは、ヌール・ファティーンによるマンタスマン廟の整備を「スンナ派の勝利」と解釈しているが、なぜそのように解釈できるかが私にはよく理解できない。むしろシーア派への配慮か、もしくはスンナ派も含めたハラブのムスリム全体に支持されることを期待しておこなったことと考える方が妥当であらう。

- ㉓ 彼以外の研究者として、次の二人をあげておく。ホルトはヌール・ファティーンがシーア派弾圧をためらったことには触れていないのに対して【Holt 1966:78】、キンは簡単ではあるが言及している【Gibb 1969:515】。

文献表

【史料および略号】

AH: Ibn Šaddād, Taz al-Din Muhammad, *A'taq al-hatira fi dīār unarā' al-Šām wa al-Jazīra* (the volume on Ḥalab). Ed. D. Sourdel, Damascus, 1958.

BDA: Ibn al-A'īr, Taz al-Din 'Alī, *al-Tarīḥ al-bāhir fi al-Dawla al-Aṭabakiya*. Ed. 'A. A. Tūlaymāt, al-Qahira, (1963).

- BT: Ibn al-ʿAdīm, ʿUmar. *Buġyat al-ṭalab fī tāriḥ Ḥalab*. Ed. S. Zakkā. 10 vols. + index. Dimašq, 1988.
- dTD: Ibn al-Qalānisi, Ḥamza. *Dayl Tāriḥ Dimašq*. Ed. H. F. Amedroz. Beirut, 1908.
- KT: Ibn al-Aṭīr, ʿIzz al-Dīn ʿAlī. *al-Kāmil fī al-tāriḥ*. 10 vols. + index. Bayrūt: Dār al-Kutub al-ʿIlmiya, 1998.
- RD: Abū Šāma, Muḥammad. *al-Rawḍatayn fī aḥbār al-dawlatayn*. Ed. M. Ḥ. M. Aḥmad. 2 vols. al-Qāhira, 1956–1962.
- TDM: Ibn al-Furāt, Muḥammad. *Tāriḥ al-duwal wa al-mulūk*. 9 vols. Ms. A. F. 117–125. Die Österreichische Nationalbibliothek. Wien.
- ZH: Ibn al-ʿAdīm, ʿUmar. *Zubdat al-ḥalab fī tāriḥ Ḥalab*. Ed. S. al-Dahhān. 3 vols. Dimašq, 1951–1968.

〔書誌〕

- Ahmad, M. H. M. “Some Notes on Arabic Historiography during the Zengid and Ayyubid Periods (521/1127–648/1250).” *Historians of the Middle East*. Ed. B. Lewis and P. M. Holt. London, 1962: 79–97.
- al-Daywahji, S. “Madāris al-Mawṣil fī al-ʾahd al-atābaki.” *Sūmir (Sumer)* 13 (1957): 101–118 (in Arabic).
- Eddé, A. M. “Une Grande famille de shafites alépins.” *Revue du Monde Musulman et de Méditerranée* 62 (1991): 61–71.
- Elisséeff, N. *Nūr ad-Dīn*. 3 vols. Damas, 1967.
- Gaube, H. et al. *Aleppo*. Wiesbaden, 1984.
- Gibb, H. A. R. “The Career of Nūr-al-Dīn.” Gen. ed. K. M. Setton. *A History of the Crusades*, vol. 1. Madison et al., 1969: 512–527.
- Ḥalīl, ʿI. *ʿImād al-Dīn Zankī*. Bayrūt, 1972.
- Ḥalīl, ʿI. *Nūr al-Dīn Maḥmūd*. Dimašq et al., 1980.
- Holt, P. M. *The Age of the Crusades: The Near East from the Eleventh Century to 1517*. 1986. London, 1993.
- Khayat, H. M. “The Šīʿite Rebellions in Aleppo in the 6th A. H. / 12th A. D. Century.” *Rivista degli Studi Orientali* 46 (1971): 167–195.
- Lapidus, I. M. *Muslim Cities in the Later Middle Ages*. 1976. Cambridge et al., 1984.
- Madelung, W. F. “The Spread of Māturīdism and the Turks.” *Actas do IV Congresso de Estudos Árabes e Islâmicos, Coimbra-Lisboa 1968*. Leiden, 1971: 109–168. Rpt. in *Religious Schools and Sects in Medieval Islam*. London, 1985: II.
- Mayer, H. E. *The Crusades*. Trans. J. Gillingham, 2nd ed. Oxford, 1988.
- Rabbat, N. O. “The Ideological Significance of the *Dār al-ʿAdl* in the Medieval Islamic Orient.” *International Journal of Middle East Studies* 27 (1995): 3–28.
- Sauvaget, J. *Alep*. Paris, 1941.
- Sourdel, D. “Les Professeurs de madrasa á Alep aux XII^e–XIII^e siècles d’après Ibn Šaddād.” *Bulletin d’Études Orientales* 13 (1951): 85–115.
- Ṭalas, M. A. (1956) *al-Ātār al-islāmīya wa al-tāriḥīya fī Ḥalab*. Dimašq, 1956.
- EI²: *Encyclopaedia of Islam, New Edition*. Leiden, 1954–2003.
- 岡久建正「ザンギー朝アレッポのアトラク建設——中世イスラームにおける教育施設の社会史に向けて——」『イスラーム世界』五三号、一九九九年：一一二五頁。
- 梅田輝世「スール・アッ・タイーンのダマスカス攻略（一一四六—一一五四）」『梅花短期大学研究紀要』二八号、一九七九年：七一—八二頁。
- 大総哲也「ザンギー朝の統治と行政官——モスル・アターベク王朝の場合——」『東洋学報』六九卷三・四号、一九八八年：三一—八二頁。
- 谷口淳一「十一世紀のベラフにおけるカルアとマデーターナ」『東洋史研究』四九卷二号、一九九〇年：七〇—一〇六頁。
- 谷口淳一「十一—十三世紀のベラフにおけるウラマー—スナ派優遇策とウラマー——」『史林』七九卷一号、一九九六年：六一—九四

頁。

谷口淳一「ハラブ史の中のライース達」『西南アジア研究』四九号、一九九八年…三四—五二頁。

谷口淳一「十一—十三世紀ハラブのカーディーと支配者」『東洋史研究』五七卷四号、一九九九年…一—三七（七六—八〇四）頁。

谷口淳一「十二世紀初頭ハラブの住民指導者たち」『史窓』五八号、二〇〇一年…二三一—二四二頁。

三浦 徹「ダマスクス郊外の都市形成——十二—十六世紀のサリヒーヤ——」『東洋学報』六八卷一・二号、一九八七年…二九—六三（一二〇—一五四）頁。